

<日本レジャー・レクリエーション学会第 40 回学会大会 特別セッション>

学会の歩み—今までとこれから—

麻生 恵<sup>1</sup> 上岡 洋晴<sup>1</sup>

Special session

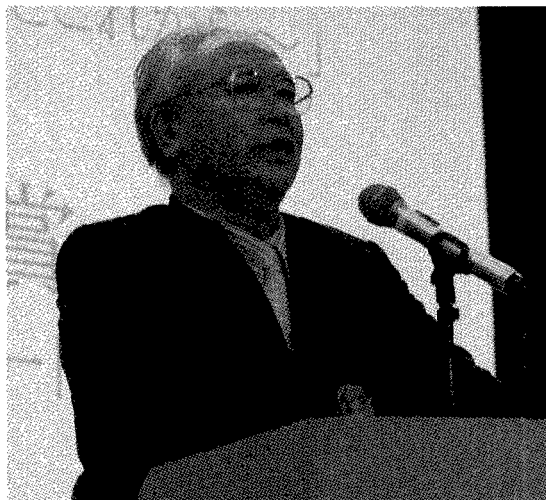
Footprint of the society — The past and the future —

Megumi Aso<sup>1</sup> and Hiroharu Kamioka<sup>1</sup>

1. 日本レジャー・レクリエーション学会賞  
「貢献賞」受賞者によるショートスピーチ

今回、12名の先生方に貢献賞が授与されたが、その中から5名の先生よりショートスピーチをいただいた。

秋吉嘉範 先生



私はレクリエーションに関わって50年になる。学会の前身である研究会の頃から45年、東京教育大学に在学していたころ前川実先生、浅田隆夫先生と一緒に埼玉県狭山の農村で生活改善として研究を行った。特に日本で初めて農機具が導

入され機械化が進んで自由時間が増え、その時間をどう使ったよいかということで、私はストップウォッチを持って24時間調査をした。今考えるとプライバシーに関わるようなこともやった。

卒業後、九州大学に勤めるようになったが、単に考えるだけでなく動くこと、楽しむことが出来る人間になりたい、皆さんにもそうなってもらいたいということでやってきた。

私の行ってきた仕事を4つお話ししたい。1つは、障害者の皆さん（当時私たちが関わったのは精神病患者さん、知的障害の患者さん、刑務所の受刑者、少年院・少女園の入所者）、こうした方々は当時社会から遮断され行動が制限された生活をされていた（精神病院も鍵がかけられていた）。私はこうした方々に何としてもレクリエーションをしていただきたいと考え、私はボランティアとして関わることになった。指導を通して刑務所では特殊面接員という形で25年間にわたり指導することになった。刑務所では走ること、他人と口をきくことが制限されている。そこで私はグラウンドで走ることをお願いした。ラジオ体操とストレッチ、ボールを柔らかくして外に飛び出さないようにしたソフトボール、ベースランニングをやった。陶器づくり、写真なども行い、それを販売し、収益を得ることを試みた。

2つ目は高齢者問題である。当時、ソビエト社会主義共和国に出かけた。ソビエトでみたのは高

1 東京農業大学地域環境科学部  
Faculty of Environmental Science, Tokyo University of Agriculture

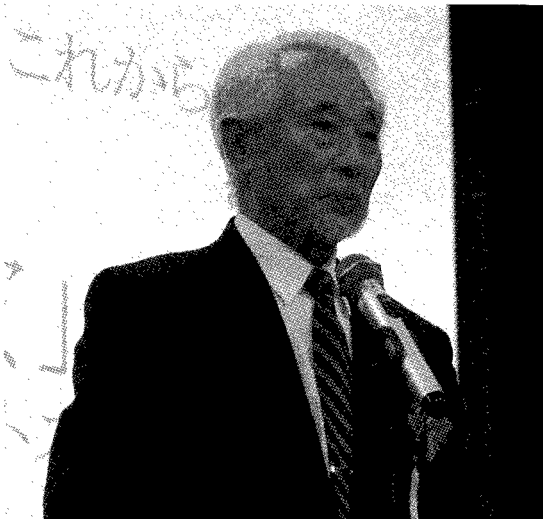
齢者が一日中動かず公園のベンチで座っている姿であった。ソ連では当時、休息の権利（週休2日であるが、土曜日は買い物、家事でつぶれてしまう）があったが、労働者は現役時代働きづめで、リタイヤした途端に自由な時間をもてあます、動かなくなる。そこでレクリエーションを楽しんでもらう。それは健康づくり、気分転換という意味合いもある。特に団地は狭く、公園も少ない。そこで空間を使ってランニング、ウォーキングをしてもらうことなどであった。

3つ目は、高齢者の中でも特別養護老人ホームに入居されている方はなかなか体を動かさない。この方々に対して特別養護老人ホームで生活することそのものをレクリエーション化することを考えた。掃除、食事、ファッションショーの開催、化粧品メーカーの協力による化粧指導、食堂のオバサンにレストランのウェイトアの格好をしてもらって雰囲気を変えるなど、日常生活のレクリエーション化の試みをいろいろ行った。

4つ目は職場レクリエーションを、日本レクリエーション協会にて1年間学び、そこから派遣される形でその実践を行った。謝礼も戴いたがそれを高齢者レクリエーションにつき込んだため、今もって貧乏である。

少し長くなったが、最後に、今回の受賞に対し心からの御礼を申し上げたい。

### 石井 允 先生



私は長く学会に関わっていただけで、貢献賞などという賞をいただくほどの仕事をしていない。このような賞を頂戴し、少し恥ずかしく、皆さんに申し訳ない気がしている。

昭和35年（55年前）、国際基督教大学で三隅先生によるワークショップ参加のお誘いをいただいた。高橋和敏先生がその事務局で活躍されていたが、それが私のレクリエーションの始まりである。その後10年ほど経って学会が発足した。それからずっと学会に顔を出してきた。

本日はその仲間の皆さんにお会いしたいということで出席させていただいたが、私は丁度今年が喜寿で、77歳になった。まだ元気なので今後ともよろしくお願ひしたい。

### 高橋和敏 先生



私も石井先生と同様に長くこの学会に関わってきた。このような賞をいただいて、身に余る光栄である。大変嬉しく思っている。現在、(株)余暇問題研究所に在籍している。この研究所は唯一の民間企業である。そこで毎月原稿を書く仕事があって、お世話になっている。

学会に対しては、常に世の中の動きに敏感であってほしい。世の中に貢献するなどというおこがましいことではなく、たとえ小さなことであっても学会としての力を発揮してほしいと願っている。

受賞に対しては御礼を申し上げたい。

## 松田義幸 先生



長くご無沙汰しているが、私は3つほどお話を申し上げたい：

1968年に清水幾太郎先生が、『現代思想』の下巻で「レジャー時代の到来」という1章を書かれた、これが学術的な見地からレジャー問題に提言した最初であったと思っている。私は学生時代の終わり頃にこれを読んで、日本経済新聞社に入った。日本が週休2日制を導入したときに日本人の価値観はどう変わるのか、それが大きな関心事で研究所を作ってもらった。その後、通産省が余暇開発センターを設立したため、1972年にそこに移ることになった。そこではレジャー時代の到来ということで「レジャー白書」を毎年刊行することになった。その頃、大阪でレクリエーション学会大会が開催され、基調講演を行うことになった。もう一人が前川峰雄先生（初代学会長）で、一緒に部屋に泊まることになり、緊張のあまりゆっくり眠れなかったことを覚えている。

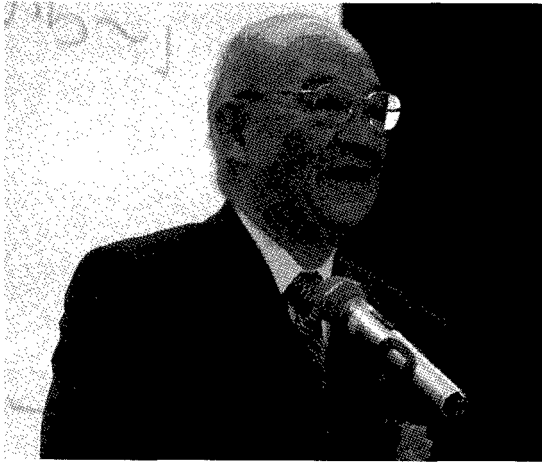
それからしばらくして浅田隆夫先生から余暇開発センターに籍を置いたままでよいかから筑波大学に移ってくるよう依頼があった。筑波大学の教育研究内容を体育のスポーツ振興から、レジャーのスポーツ振興に移行させたい、とのことであった。筑波大学の国家公務員でありながら、ほとんど余暇開発センターに籍をおいて日本のレジャー政策の立案に携わってきた。

そのうち、レクリエーション学会にも入るよう要請され入会することになった。その時期は江橋慎四郎先生が会長（第2代）で、私はアメリカやヨーロッパの動向をみて「レジャー・レクリエーション学会」の方がよいという提言をしたが、なかなか聞いてもらえなくて次第に疎遠になり、自然退会をした。次に浅田先生が会長（第3代）になられたときに、学会が日本学術会議の学術登録団体の手続きを誤り、最初からやり直さなければならなくなった、については日本大学総長の木下先生と一緒に学術研究団体としての実績づくりをしてほしいということで再入会をした。業績ができ、再手続きをする際に、学際的な学術団体ということで、どこの学問分野に位置づけるかということになった。その時、現会長の鈴木秀雄先生が「レジャー・レクリエーション学会」という名称で、引き続き体育科学領域の学会に登録してほしいということで再登録を果たした。そのお陰で、今ではいろいろな学問分野の方々が本学会に入会して下さるようになったと思っている。

次に、鈴木祐一先生が会長（第5代）の時に、一期でよいかから会長職を引き受けてほしいと頼まれ、会長（第6代）をお引き受けすることになった。

3番目の話として、余暇開発センターで1970年代から1980年代まで仕事をした基礎理論に関する回想録を執筆し、博士論文のデッサンにしようとしていた。7～8割出来上がったところで、縁あって学校法人尚美学園大学の理事長職と学長職を引き受けることになり、私にとっては最も合わない仕事に就いてしまった。回想録の方は今後の楽しみとして残してあって（先送りになっていて）、生きていれば書き上げたい。川森孝三先生も80歳になってから博士論文を書かれた。私もそれをやり遂げたいと思っているが、目途が立ったら早くリタイアメントに戻りたいと考えている。

## 油井正昭 先生



財団法人国立公園協会に務めているが、この度、思いもかけない学会賞をいただき、まことに有難く、選考に当たった先生方の期待に応えるよう頑張りたい。

私は千葉大学に在籍していた時に農大の学長を務められていて、本学会の理事も務められた進士五十八先生に誘われてこの学会に入った。どこの学会でもそうであるが、学会を発展させて会員の活動を盛んにする、特に学会大会を魅力的にして多くの方に参加してもらう、そこで日頃の研究を発表し合って互いに研鑽する、このように思いながら日頃の活動を長く続けさせていただいた。そういう中で今日の学会の発展に少なからずつながったと思うことを3つお話したいと思う。

1つ目は、20年ほど前の学会発表は要旨を2ページ書くのが決まりであった。何回か発表する中で2ページでは足りないことを実感し、常任理事会にページ数を増やして内容を充実させるよう提言した。その結果、現在では4ページまで書けるようになった。私の発表記録をみると1991(平成3)年では2ページ、次の1994年では4ページになっているので、その間に改正されたのではないかと思う。学会誌の質の向上に寄与できたのではないかと考えている。

2つ目は、私が千葉大学に勤務していた時に第31回学会大会を千葉大学園芸学部で開催した。千葉大学園芸学部のキャンパスには、日本庭園やフランス式庭園など学生の教材としての庭園の見本園があり、また様々な樹木、珍しい樹木が植え

られている。私としては、大会参加者にキャンパスを見て欲しいと考え、キャンパスツアーというものを開催した。参加いただいた方々から大変好評だったので、それから学会大会開催地の状況をレジャー・レクリエーションという観点からよく見よう・学ぼうということになり、翌年から「地域研究」がスタートした。地域研究が入ることにより、学会大会日程が3日間に膨らんだわけであるが、他学会の大会も3日間にわたる立派なものも多く、そういう意味で本学会のステータスを高めたと思っている。

3つ目は、本学会大会の発表は口頭発表が中心であったが、ポスター形式の発表を提案して平成17年の国際基督教大学の大会から、ポスター発表が加わるようになった。ポスター発表の場合、学会員でなくても会員が名を連ねていれば発表できることになっていて、発表形式を増やすことによって、なるべく多くの方々が大会に参加できるようになったと考えている。今回の大会でもポスター発表が32件、発表者の延べ人数が76人にもなるという状況であり、ポスター発表を設けて良かったと思っている。当時、初めてのことで、学会大会開催校の高橋伸先生がご準備・ご尽力いただいたことを覚えている。

そんなことで私自身の活動を通して、学会大会を少しでも盛んにして、大勢の方が参加していただけるような仕組みを作り、学会発展に寄与できたのではないかと思う。

## 2. 「日本レジャー・レクリエーション学会の歩み—1996～2010—」の紹介

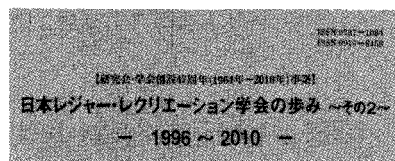
理事長 麻生 恵



日本レジャー・レクリエーション学会は1964年のレクリエーション研究会から数えると47年目になり、大会としても40回目ということになる。

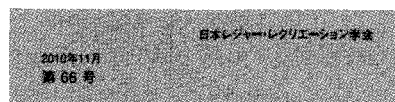
学会の足跡を明らかにするため、15年前の1995年（第25回学会記念大会時、於：関東学院大学）に「日本レジャー・レクリエーション学会の歩み－1964～1995－」が刊行された。これはそれまでの学会活動32年間の記録を詳細にまとめたものであった。特に、現会長の鈴木秀雄先生（第8代）が理事長時代に大変なご苦勞をなさって刊行された。

それから15年が経過し、沢山の研究や活動の成果がストックされてきたため、今回の第40回大会開催を記念して、「日本レジャー・レクリエーション学会の歩み～その2～－1996～2010－」を編纂することになった。



歩み

The Current 15 Years History on Japan Society of  
Leisure and Recreation Studies  
- 1996 ~ 2010 -



内容は、(1) 歴代理事長による就任時の学会の振り返り、(2) 資料（学会の詳細な活動記録）、ここまでは「～その1～」と同じであるが、今回新たに(3) 特別企画「レジャー・レクリエーションの研究をめぐる動向と将来展望」という特別企画を盛り込んだ。学会として、研究面の歩みをきちんと把握しておくことが重要な使命だと考えたからである。

この特別企画は、それぞれの研究分野ごとに、過去15年間の研究動向をレビューしていただ

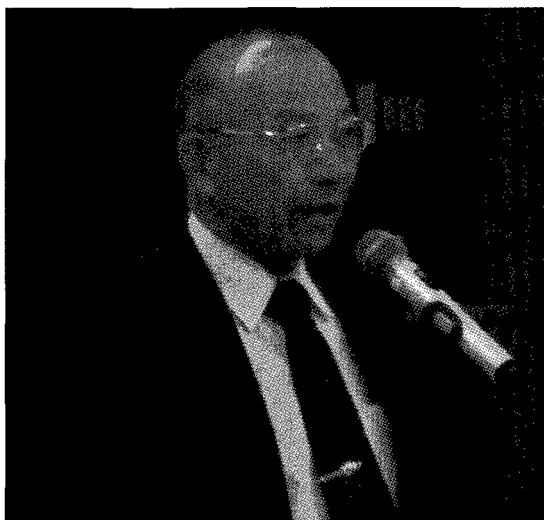
き、今後の研究課題や方向性を展望するというものである。担当いただいた先生方には、お忙しい中、膨大な量の論文に目を通しながら全体のトレンドを把握していくという大変な作業をお願いした。ここに心より御礼を申し上げたいと思う。また、今後研究を志す若い研究者にとっても大きな指針になると考える。

この成果は、新しく動き始めたホームページの新システムに掲載して会員には無料で提供したい。また並行してオンデマンド印刷を行い、希望者に有料で販売する計画である。

年度内には出来上がる予定なので、よろしくお願ひしたい。

### 3. 今後の活動展開にむけて

会長 鈴木秀雄



#### はじめに

本日は歴代の会長・副会長の先生方、貢献賞を受賞されますこととお忙しい中をお運びいただき有難うございました。先ずは感謝と御礼を申し上げたいと思います。

私がこれから申し上げることは理事会に諮っていることではなく、現在の任期も来年の3月31日までですが、来年の4月からは新たに3年の任期が始まり、組織は継続しますので、是非ここで今後の学会の展開について会長としての考えを少しお話ししたいと思います。

先ほどの松田先生のお話の中で我々の学会の名称が最終的にレジャー・レクリエーション学会となったのは、英文表記ではすでに Leisure という文言が入っていて、英文と日本名を合わせる意味からも、あるいは領域を明確にする意図からも必要なことであった。1991年の函館の学会大会で名称変更をさせていただいた経緯があり、松田先生のお話を聞いて今そのことが鮮明によみがえってきました。

先ほどの基調講演・シンポジウムの中にあつたように、例えば地域づくり（地域おこし）、あるいはトラスト運動の中で感じたことは、我々が名称で表現する領域はどちらかという縦軸にあたるものである。それに対してレジャー・レクリエーションは種目や活動ではないので、実際には、時として具体的に見えないところでもある。個人のありようなどというところがあるので、それらが横軸に現れるというよりはむしろ傘の中に縦軸に現れるようなもの、活動形態やいろいろな名称で捉えられるものがそこに縦軸として組み込まれている。それだからこそ名称が現れてくる地域づくりやトラスト運動など縦の表現として出てきた名称が、それぞれ横のつながりとしての「連携」というものの必要性が述べられ、本日のシンポジウムの中では「地域」という名称でなされていたと思う。レジャー・レクリエーションはそういう縦軸にある多くの活動を覆う傘として捉えながら横断的に考え、仕事の局面であろうとそうでなかろうとレジャー・レクリエーションとどう向き合い関与するかということが重要ではなかろうかと思っている。

特に日本のレクリエーション運動は私が関与している関東学院大学の初代学長であった白山源三郎先生が日本レクリエーション協会の初代の専務理事をされており、1932年の第10回ロサンゼルス・オリンピックに水泳連盟の役職をお持ちでお出かけになったときに、そこで第1回世界レクリエーション会議に出席され、日本へのレクリエーション運動（Movement）の導入を図るということを積極的に進められた。また三隅先生は Activity を如何に推進していくかという流れの中で、学会活動を積極的になさってこられた。

レクリエーション運動の中で、本質論と現実論

を考えると一般社会が考えるレジャー・レクリエーション、そして専門家の中で考えるレジャー・レクリエーションは十人十色であり、その違いについては個々の研究者の論議にお任せするとして、しかし本質論と現実論が乖離していることも確かだ、そこで私は今までのメモリーに少し上書きして自分たちが持っているレジャー・レクリエーション観、レジャー・レクリエーション論、最新の社会の中で捉えられるレジャー・レクリエーションとは何かということも考えていかなければならないと思うわけである。旧態依然としたレジャー・レクリエーションではなく、学問的にもしっかりしたものの上書き保存していくことが重要である。

#### 今後の学会活動の方向性と課題

その中で我々の学会の方向性は 油井先生が発表要旨を2ページから4ページにされ、ポスターセッションの導入に関わられ、そして地域研究の前身であるキャンパスツアーも計画された。こういう中でこれからの学会、いくつかの課題を早急に解決していかなければならないと思うし、あるいは長期的視点にたつて「研究者を育てていくという責務」もあると思う。そこで1つの提案として高等教育機関の中で学部・学科を構築していくこと、研究科または専攻を立ち上げるということはなかなか難しい分野であるが、しかし、すでに47年の伝統の中で、現在、学長職にある先生もおられるし、学長の経験をお持ちの先生方もいらっしゃる。すでに存在している研究科に籍をおかれて研究者を指導されている先生もいらっしゃる。そういう先生方のお力をお借りしながら、大学が全てではなく、いろんな研究所や民間のシンクタンクもあるが、しかし研究者を輩出するという意味ではそういう先生方との連携の中で、またご指導のもとでレジャー・レクリエーションに関わる学位を取得する、そういうものを試行するというのも、ひとつ道を見つけていかなければならないのではないかと思っている。アメリカ流に言えば、そこにグラント（grant）というものがあって、民間の企業からの寄付をいただき、それを受ける先生方にも研究費が提供される、そんな道を1つ考え、高等研究教育機関の中で新たな

研究者を増やしていくことも大事なことでないかと思っている。

### 研究プロジェクトの立ち上げ

それから学会活動の中で以前から「研究会」というものが行われていたが、どうしても東京周辺での研究会が中心であった。学会発展の過程の中では支部もいくつか開設されたが、現在のようなIT社会、ネット社会の中では物理的な距離はクリア出来るような状況になってきた。したがって学会としては、学会企画の研究プロジェクト、こういうものを立ち上げて特に今回の「学会の歩み」の中で指摘されているように、原論・歴史・本質論といった分野の研究の質や量がやや少ないように見受けられる。我々の研究は本来、個人の関心や興味が中心になるものと思うが、しかし学会がそこだけに依拠していれば、ややもすれば研究領域の脆弱さをもつことになる。よって会員の皆さんの英知を集めて学会の企画としてプロジェクトとして立ち上げ、何年かの年次計画の中で、領域の広がり、領域の深まり、これを学会としても探求していかなければならないだろうと思う。

### 将来構想検討委員会の立ち上げ

そして会員の多くの方々に参加していただけのような形態、さらに専門家の育成ということを見ると、現行では学生会員の会員枠は設けられていない状況である。こういうことを鑑みると各先生方が指導されている学生達の発表の機会が得られるように、準会員であるか学生会員であるかは別として、鋭意そういう領域を整えて、学生がそういう領域に関心を持ち、単に関心をもった研究者が我々の学会に入ってくるだけではなく、関心をもった学生を学会員として招き入れ、研究者として我々も一緒に研鑽を積んでいけるような、そういう会員の制度も整備していきたいと願っている。

そのためには、規約、規則の改正もすみやかにしていかなければならないと思うので、「将来構想検討委員会」を立ち上げると共に、その中にいくつかの作業部会を作って、会員の多くの皆さんにも参画いただくような形態、あるいは新しく4月から理事になられた先生方にも積極的に

ご努力いただいて、将来構想検討委員会の作業部会の中でお力を注いで頂きたいと思っている。

### 5つのプロジェクト

具体的には学会は研究団体なので、研究に大きな果実が生まれることが大事な領域だと思っている。そこで、随意、研究プロジェクトを立ち上げることを考えていきたいと思っている。その中で具体的には5つほどの研究プロジェクトを私なりに考えてみた：

1つは「**学会企画研究プロジェクト**」。これは学会自体が先ほど申し上げたように研究領域やテーマを策定して、学会メンバーで構成して、研究領域に広がりや深まりを生み出していく。資金としては学会からの交付金、これを少し考え、現在まではどちらかといえば学会運営のルーチンに追われていた内容を、研究にシフトして学会企画研究プロジェクトを立ち上げるのはどうか。

2番目には、学会のグループや団体からの提案により「**共同研究プロジェクト**」を立ち上げていく。資金は一部学会からの補助金を考えたかどうか。

3番目には、大学でいえば冠講座というものがあるが、いわば「**冠研究プロジェクト**」というものを立ち上げてはどうか。これは先ほどのシンポジウムにもあったように、これから大きな期待と使命をレジャー・レクリエーションが担っていくだろうと思われる。資金は資金提供による助成金、これを求めていきたいと思っている。

4番目として、現在ホームページを立ち上げて我々に何が出来るかということ企業、団体、行政向けに発信しているが、広く理解を頂きながら、企業、団体、行政からの委託による研究を「**受託研究プロジェクト**」として立ち上げる。これが資金提供をして、活動資金に充てていく。こういうことを考えたかどうか。

5番目に若手研究者の「**育成研究プロジェクト**」。これは研究科につなげる若手研究者を公募するなりして資金はグラント、寄附金をお願いする。研究科に進む学問生にとって資金提供機関・団体の要望のある研究内容に関わることで果実の提供と研究科院生の研究活動とを連動させて、指導教員への資金提供にもメリットがあるようなこ

とも考えながら積極的に社会に働きかけて、若手研究者の育成に支援をする。

このような形態での研究プロジェクトとして立ち上げることが考えられるのではないか。このように考えた時に、将来構想検討委員会を立ち上げ、随意、それぞれの研究プロジェクトの整理に関わるワーキンググループ、規約・規定等の整理に関わるワーキンググループ、中長期にわたる具体的な年次計画を策定するワーキンググループを立ち上げ、少なくとも1年間に何がしかの進歩・発展をするような学会活動をこれから展開していきたいと思っているので、会員の皆さん、諸先輩・諸先生方のご支援をお願い申し上げたいと思う。

### おわりに

本日お見えの鈴木祐一先生はスピーチをご遠慮されたが、皆さんの思いを全てお話されたかったのではないかと思う。鈴木祐一先生は東京女子体育大学の学長を務められ、文部科学省にも長くおられたので、文科省科研費のプロジェクトとして考えられるだろうし、そのような折にも是非御指導賜りたいと思っている。あらゆる財団が助成している基金に対してもこのプロジェクトをそこに充てて資金的な援助がいただけるよう、そんな学会として次の第50回大会に向けて頑張っていきたいと思っている。諸先輩の変わらぬご指導をいただきながら、会員相互の研鑽をはかりつつ、役員一同頑張っていきたいと思うので、御協力のほど、よろしく願い申し上げます。